

『藤原為家研究』 正誤補訂

佐 藤 恒 雄

はじめに

本稿は、先に刊行した小著『藤原為家研究』（笠間書院、二〇〇八年九月）の正誤補訂である。入念に校正にあたり、完璧を期したつもりであったが、類似の字の誤りを見落したり、その他不用意なミスも残ってしまったので、その補訂を主としながら、「藤原為家年譜」では、形式（年齢表示）の不統一を整え、その後に気づいた事項（為家幼少期と蹴鞠関係を主とする）を追加することも含めた。中で、私にとって最も大きな関心事は、為家の幼名の問

題である。為家の幼名は「三名」と書き表されてきたのであるが、それは「みな」や「みつな」ではなく、「みみょう」と呼ばれていたことが判明したことである。『明月記』紙背の仮名消息に「みみやう」と表記されていることを見過ごしていたのであるが、刊行直後に気づき、残念ながら小著に反映することはできなかった。また誕生の時期についても、葵祭のころかとする稲村栄一氏の説を見落としていた。それらのことも含め為家の幼少期については、稿を改めて考えてみたいと思う。

『藤原為家研究』 正誤補訂

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|-----|-----|-------------|------------------|
| 四三頁 | 六行 | 記を見えず、 | 記は見えず、 |
| 四三頁 | 一二行 | 藤原為家（幼名、三名） | 藤原為家（幼名、三名〓みみょう） |

| | | |
|------|-----|-------------------------------|
| 四五頁 | 五行 | 女房から、 |
| 四八頁 | 六行 | 「悲嘆ノ至リ、喩ヘヲ取ルニ物ナシテヘリ」 |
| 四八頁 | 七行 | 『たまきはる』の著者健御前も、作品の末尾を |
| 五五頁 | 二行 | 少女 |
| 五五頁 | 三行 | 少女「一六・一七・一八・一九行モ」 |
| 五七頁 | 一行 | 倩憶 |
| 八〇頁 | 三行 | 倩憶 跡を憶ふに |
| 一八五頁 | 一〇行 | 息男の珍事を |
| 二八六頁 | 一行 | 昭和三十六年月 |
| 三〇七頁 | 二行 | 松平文庫本 |
| 三二九頁 | 七行 | 二類本一種 |
| 三七二頁 | 八行 | すなわち |
| 三八七頁 | 五行 | 慎りが |
| 三九九頁 | 六行 | またかげかくす秋の夜のつき |
| 四三八頁 | 七行 | すすめしみちの |
| 四五二頁 | 一行 | この年五月以降の寡作は、…思われもする。 |
| 四七四頁 | 五行 | 伴ってた |
| 四七九頁 | 一〇行 | ねばならなかった |
| 四八一頁 | 一三行 | 「入冠 <small>（きんかん）</small> 絵箱」 |
| 五〇三頁 | 五行 | 前掲注（33）論考で、 |
| 五〇五頁 | 五行 | 土御門の皇子 |
| 五三四頁 | 一六行 | かつて |
| 五四四頁 | 一〇行 | 准三宮 |
| 五六〇頁 | 一行 | 已上当世作者 |
| | 五行 | （括弧内は旧国歌大観番号）。 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------------------------|---------------------|----|-------------------|----|----|--------|----------|------|--------|------|-----|---------------|---------|------|-------|----------|-------------------------------|---------------|---------|-----|------|--------|--------------------------|
| 女房（幼時より内親王の養育に献身してきた姉健御前）から、 | 後年健御前は『たまきはる』の作品末尾を | 少女 | 少女「一六・一七・一八・一九行モ」 | 倩憶 | 倩憶 | 息男の椿事を | 昭和三十六年四月 | 松平文庫 | 二類本第一種 | すなわち | 慎りが | まだかげかくす秋の夜のつき | すすめしみちの | （削除） | 伴っていた | ねばならなかった | 「入冠 <small>（きんかん）</small> 絵箱」 | 前掲注（33）所引論考で、 | 土御門院の皇子 | かつて | 母准三宮 | 已上当世作者 | （新編国歌大観番号により、括弧内に旧国歌大観番号 |
|------------------------------|---------------------|----|-------------------|----|----|--------|----------|------|--------|------|-----|---------------|---------|------|-------|----------|-------------------------------|---------------|---------|-----|------|--------|--------------------------|

| | | | |
|-------|-----|-----------------------|--------------------------|
| 五七六頁 | 一行 | ⑦×↓○（竟宴↓以後） | を付す。 |
| 五七七頁 | 四行 | ①⑨×↓○（竟宴↓以後） | ⑦○↓×（以前↓竟宴） |
| 六〇四頁 | 一六行 | 御徙移也 | ①⑨○↓×（以前↓竟宴） |
| 六〇五頁 | 五行 | 天競の詩論 | 御徙移也 |
| 六五三頁 | 八行 | 定家との間に | 元競の詩論 |
| 七九〇頁 | 四行 | をかきよしを | 定家との間に |
| 七九〇頁 | 五行 | うち詠じたるにも | をかきよしを |
| 七八八頁 | 九行 | 『長綱百首』とともに | うち詠めたるにも |
| 八七三頁 | 三行 | その図板が | 『長綱百首』とともに |
| 八八九頁 | 六行 | 泰平時節 | その図版が |
| 九八二頁 | 二行 | 及んでゐることを寓し | 泰平時節 |
| 一〇三八頁 | 一五行 | 遠樹星残リテ鐘漏曙ケ禁松風起チテ管絃秋ナリ | 及んでゐることを寓し |
| 一〇五九頁 | 三行 | 不可口ト云々。 | 遠樹星残ル鐘漏ノ曙 |
| 一〇六四頁 | 九行 | 遁世之身多口 | 不可□□ト云々。 |
| 一一二四頁 | 九行 | 下庄をハ | 遁世之身多□ |
| 一一二四頁 | 一〇行 | 為相ニ | 下庄をハ |
| 一一四八頁 | 二行 | 攻め上ほり | 為相に |
| 一一八九頁 | 一四行 | この段階に展開した | 攻め上り |
| 一一九三頁 | 二行 | 為仁親王に讓位、 | この段落に展開した |
| | 上行 | 幼名、三名。 | 為仁親王（4）に讓位、 |
| | 上行 | （母中務少輔藤原教良女）。 | 幼名、三名（みみょう）。 |
| | 下行 | （母中務少輔藤原教良女）。 | （母の母中務少輔藤原教良女）。四月葵祭の頃誕生か |
| | 下行 | （稲村栄一説）。 | （稲村栄一説）。 |
| | 下行 | 自歌合（俊成判）成るか（同歌合）。 | 自歌合（俊成判）成るか（同歌合）。 |
| | 下行 | 兼美の御前に参ず（明）。 | 兼美の御前に参ずるに、良経引導せしめ給い、過分の |
| | 下行 | 兼美の御前に参ず（明）。 | 賞翫の仰せに預かる（明）。 |

| | |
|----------|----------------|
| 上 一七行 | 〔正・26ノ次ニ追加〕 |
| 上 二〇行 | 〔3・23ノ次ニ追加〕 |
| 上 二二行 | 小女毎日發り、小男（清家か） |
| 上 二四行 | 〔7・13ノ次ニ追加〕 |
| 上 一行 | これを行う（明）。 |
| 上 一行 | 〔12・11ノ次ニ追加〕 |
| 上 九行 | 定家宅に来る（明）。 |
| 上 一五行 | 守成親王を |
| 下 六行 | 〔2・9ノ次ニ追加〕 |
| 下 一八行 | 〔②・21ノ次ニ追加〕 |
| 上 二三行 | 昨日より痢氣あり（明）。 |
| 上 二四行 | 〔8・11ノ次ニ追加〕 |
| 上 二六行 | 〔10・26ノ次ニ追加〕 |

3・1 定家、前日妻室を相具して嵯峨に向かい、この日高倉に行き、両小兒らを相具して九条に帰る(明)。

3・19 両兄、定家室に伴われ日吉社に参詣、日入りに帰来す(明)。

3・24 定家、腰病治療に湯治を試みるべく、小兒らを相具し乗車して嵯峨に行き向かう(明)。

4・18 定家、嵯峨を出で昏黒九条に帰る。これ以前妻室小兒らを相具して帰宅す(明)。

小女の病悩二十日に余るもなお毎日発り、小男(清家)

8・3 小兒三名の所悩甚だ重く、腹取(如来房尼)を喚び寄せて之を取らしむ(明)。

これを行う。「此子於事物吉、自今所為悦也」「兩人随分吉事無為遂了、為悦」(明)。

12・18 定家、三名を相具して(良経邸にか)参上、女房の見参に入りて退下す(明)。

定家宅に将来さる(明)。

守成親王(4)を

2・11 某所率爾作文会。題「雨中対花柳」(明)。

②・25 右中将藤原良輔家率爾狂詩会(明)。

昨日より痢気あるも、中宮任子御所に参ず(明)。

9・20 定家、三名を相具して、法性寺殿の例講に参ず(明)。

11・16 定家、朝三名乳母宅に行き、三名の髪をそり、還来す(明)。

| | | |
|---|-----------------------|---|
| 一一九六頁 | 上 二二行 下 一一行 | (明月記紙背女房奉書)。 [12・9ノ次ニ追加] |
| 一一九八頁 | 上 一三行 | [4・16ノ次ニ追加] |
| 一一〇三頁 一一〇四頁 | 上 七行 上 二七行 | 健御前を伴い、 [2・5ノ次ニ追加] |
| 一一〇五頁 一一〇六頁 一一一一頁 | 上 一四行 上 七行 上 三行 | 皇太弟守成親王(十二歳)、 皇太弟守成親王に讓位、 駒索に参仕、索分の使として |
| 一一二二頁 | 下 二二行 上 一九行 | 題「家霞」 灌頂を受く(明)。 |
| 11・24 | | 定家、夜三名乳母宅に宿す(明)。 (明月記建仁元年三月二十二日紙背消息)。 |
| 12・10 | | 内裏詩歌御会(定家不参)。詩題「松間望雪月」、歌題「池辺冬月・曉千鳥・寒草待春」(明)。 |
| 4・23 | | 定家、兩児と妻室を相具し、一条東洞院辺の棧敷において、賀茂祭の行列を見物す(明)。 |
| 5・21 | | 三名、定家に伴われ、兼実の向殿に参る(明)。 |
| 8・17 | | 権中将高通朝臣より三名の料として贈られたる夜前駒牽の駒を、三名母これを請取る(明)。 |
| 4・13 | | 健御前尼を伴い、 後鳥羽院前太政大臣大炊御門頼実第臨幸御會。上足、後鳥羽院・藤原忠信・源有雅・藤原宗長・藤原雅経・小紀・山加良・寧王丸。中足、藤原伊時・藤原範茂・藤原清親・藤原隆重・源重幸・道誓・全舜・医王丸。下足、藤原頼平・藤原忠清・藤原宗行・藤原家綱・源家長・武蔵・隼人・千熊丸ら参仕(承元御鞠記)。 |
| 東宮皇太弟守成親王(12)、 皇太弟守成親王(14)に讓位、 駒牽に参仕、牽分の使として 題「山家霞」 灌頂を受く(明)。 | | |

| | | | |
|-------|---|-----|--|
| 一一一四頁 | 上 | 一八行 | 4・11 後鳥羽院御所の御鞠会に、為家召されて参仕、夜も褻直衣を著し御前に参宿す。(明)。 |
| 一一一七頁 | 上 | 一行 | 駒牽の儀に、 |
| 一一二五頁 | 下 | 二三行 | 詩題「江山夜月明」 |
| 一一二七頁 | 下 | 一六行 | 五十韻(明月)。 |
| 一一二七頁 | 下 | 七行 | 長貞(御製講師)。 |
| 一一三二頁 | 上 | 一九行 | 懷成親王(三歳) 魚味始、 |
| 一一三三頁 | 上 | 三〇行 | 懷成親王に讓位 |
| 一一三四頁 | 上 | 一行 | 御子茂仁親王(後堀河天皇)、 |
| 一一四一頁 | 上 | 六行 | 若君將軍(八歳) 御首服。 |
| 一一四七頁 | 下 | 一九行 | ご覽ず(吾妻)。 |
| 一一四九頁 | 上 | 一〇行 | (明月記紙背光俊書状)。 |
| 一一五〇頁 | 下 | 二五行 | ・如願825・ |
| 一一五一頁 | 上 | 二行 | 為家、室町殿を去り、 |
| 一一六〇頁 | 上 | 三〇行 | 皇太子秀仁親王に讓位、 |
| 一一七〇頁 | 上 | 六行 | 法華堂に参り、堀河殿の |
| 一一七三頁 | 上 | 二九行 | 四条天皇(七歳) 御書始。 |
| 一一七五頁 | 上 | 一四行 | 四条天皇(十一歳) 元服。 |
| 一一七六頁 | 上 | 二行 | 後嵯峨天皇冷泉万里小路殿において |
| 一一七八頁 | 上 | 四行 | 將軍家若君頼嗣(六歳) 元服(吾妻)。 |
| 一一七九頁 | 上 | 一六行 | 四歳の東宮久仁親王に讓位。 |
| 一一一四頁 | 上 | 一八行 | 4・11 順德天皇、後鳥羽院御所高陽院殿への行幸御鞠会に、為家召されて参仕、夜も褻直衣を著し御前に宿仕す(明)。人数、順德天皇・後鳥羽院・関白近衛家実・前太政大臣大炊御門頼実・坊門忠信・源有雅・難波宗長・飛鳥井雅経・藤原範茂・藤原親平・藤原康光・藤原清定ら参仕(順德記)。 |
| 一一一七頁 | 上 | 一行 | 駒牽の儀に、 |
| 一一二五頁 | 下 | 二三行 | 詩題「江山夜月明」による |
| 一一二七頁 | 下 | 一六行 | 五十韻(明)。 |
| 一一二七頁 | 下 | 七行 | 長貞(御製講師)。 |
| 一一三二頁 | 上 | 一九行 | 懷成親王(3) 魚味始、 |
| 一一三三頁 | 上 | 三〇行 | 懷成親王(4) に讓位 |
| 一一三四頁 | 上 | 一行 | 御子茂仁親王(10)、 |
| 一一四一頁 | 上 | 六行 | 若君將軍(8) 御首服。 |
| 一一四七頁 | 下 | 一九行 | ご覽あり(吾妻)。 |
| 一一四九頁 | 上 | 一〇行 | (明月記寛喜二年閏正月記紙背光俊書状)。 |
| 一一五〇頁 | 下 | 二五行 | ・如願825・ |
| 一一五一頁 | 上 | 二行 | 為家、関白道家の室町殿を去り、 |
| 一一六〇頁 | 上 | 三〇行 | 皇太子秀仁親王(2) に讓位、 |
| 一一七〇頁 | 上 | 六行 | 法華堂に参り、旧御所堀河殿の |
| 一一七三頁 | 上 | 二九行 | 四条天皇(7) 御書始。 |
| 一一七五頁 | 上 | 一四行 | 四条天皇(11) 元服。 |
| 一一七六頁 | 上 | 二行 | 後嵯峨天皇(23) 冷泉万里小路殿において |
| 一一七八頁 | 上 | 四行 | 將軍家若君頼嗣(6) 元服(吾妻)。 |
| 一一七九頁 | 上 | 一六行 | 東宮久仁親王(4) に讓位。 |

| | | | |
|-------|---|-----|---|
| 一二八二頁 | 下 | 一五行 | 院御所に連句・連歌会 |
| 一二八五頁 | 上 | 二行 | 2・1 閑院内裏焼亡し、実氏の冷泉第に御幸、後嵯峨院の御意により同第を皇居とす（岡屋）。 |
| | 上 | 三行 | 〔2・1ノ次二追加〕 |
| 一二八六頁 | 上 | 九行 | 置鞠を勤む（吾妻）。 |
| | 上 | 一行 | 3・29 内裏御鞠会（弁内侍）。 |
| 一二八七頁 | 上 | 四行 | 〔2・27ノ次二追加〕 |
| | 上 | 六行 | 〔4・10ノ次二追加〕 |
| | 上 | 七行 | 後嵯峨院の遷幸あり（経俊）。 |
| 一二八九頁 | 上 | 二二行 | 後深草天皇（九歳）、読書始。 |
| | 上 | 二行 | 後深草天皇（十一歳）御元服の儀、 |
| | 上 | 四行 | 〔正・3ノ次二追加〕 |
| 一二九〇頁 | 上 | 一行 | 〔2・3ノ前二追加〕 |
| 一二九二頁 | 上 | 一八行 | 良守法師に |
| 一二九三頁 | 上 | 一四行 | 〔4・11ノ次二追加〕 |
| | | | 院御所連句・連歌会 |
| | | | 2・1 深更に閑院内裏焼亡、後深草天皇、皇后宮とともに実雄の車にて避難、冷泉富小路殿を御所とす（弁内侍）。後嵯峨院、実氏の冷泉万里小路第に避難、暫く同第を院御所とす（岡屋）。 |
| | | | 3・22 後27前花盛内裏御鞠会。鞠足、定雅・公相・公基・実藤・通成・資平・公忠・為氏（奉行）・為教・隆行（弁内侍）。 |
| | | | 3・29 置鞠を勤む（吾妻・某相伝文書書籍等目録断簡）。内裏御鞠会。公相・公基・実雄・実藤・通成・有資・為氏・為教・資平・公忠・時経ら参仕す（弁内侍）。 |
| | | | 2・仙洞御鞠会（某相伝文書書籍等目録断簡）。 |
| | | | 4・仙洞御鞠会（某相伝文書書籍等目録断簡）。 |
| | | | 後深草天皇冷泉富小路殿より遷御（経俊・弁内侍）。 |
| | | | 後深草天皇（9）、読書始。 |
| | | | 後深草天皇（11）御元服の儀、 |
| | | | 正・仙洞御鞠会（某相伝文書書籍等目録断簡）。 |
| | | | 正・24 後深草天皇幸西園寺殿御鞠会（某相伝文書書籍等目録断簡）。 |
| | | | 良守法印に |
| | | | 6・24 將軍宗尊親王最明寺殿御鞠会。將軍家・土御門中納言頭方・兵衛佐忠時・二条侍從雅有（上鞠）・侍從定氏・刑部少輔教時・右馬助清時・左近大夫將監時仲ら参仕す（吾妻）。 |

| | | | |
|-------|-------|-----------------------------|--|
| 一二九五頁 | 上 一一行 | 皇太弟恒仁親王に讓位、 〔12・28ノ次ニ追加〕 | 皇太弟恒仁親王（11）に讓位、 是年頃か 融覺、飛鳥井雅有（19）の紫白地襪勅許を 祝い賀札を贈る（某相伝文書書籍等目録断簡）。 |
| 一二九八頁 | 上 一七行 | 〔3・18ノ次ニ追加〕 | 3・27 龜山天皇、鳥羽殿に朝覲行幸、御鞠会あり （一老革鞠話・某相伝文書書籍等目録断簡）。 |
| 一二九九頁 | 上 二四行 | 大納言典侍為子没（31）（岩佐美代子説）。 | 大納言典侍為子没（31）。 |
| 一三〇一頁 | 上 三〇行 | 〔正・14ノ次ニ追加〕 | 正・15 將軍宗尊親王家御鞠始（吾妻）。 |
| 一三〇四頁 | 上 一〇行 | 延期さる（民経）、 第一皇子世仁親王（二歳）を | 延期され（民経）、 第一皇子世仁親王（2）を |
| 一三〇八頁 | 上 二五行 | 〔夏頃〕ノ記事ト、 | 夏頃か9・13前 融覺、飛鳥井雅有に、土佐日記・紫 式部日記・更級日記・蜻蛉日記等を貸与、仮 名日記の執筆を慫慂す（嵯峨のかよひ）。そ れを受け雅有先ず『無名の記（仏道の記）』 を著すか（同記）。 |
| 一三〇九頁 | 上 三〇行 | 〔9・13前〕ノ記事ヲ統合 | 7・4 融覺、飛鳥井雅有と証歌のことにつき問答す るか（某相伝文書書籍等目録断簡）。 |
| 一三一〇頁 | 上 五行 | 講師、阿仏（同）。 | 講師、女あるじ阿仏（同）。 |
| 一三一三頁 | 上 八行 | 〔5・23ノ次6・19ノ前ニ追加〕 | 5・23 飛鳥井雅有、『文永六年記』（嵯峨中院亭鞠会 記）を著す（某相伝文書書籍等目録断簡） 飛鳥井雅有、『百日御鞠結願記』（懸の花盛り に開始）を著す（某相伝文書書籍等目録断 簡）。 |
| 一三一六頁 | 下 二五行 | 6・18 詠源氏物語卷之名称 | 6・19 詠源氏物語卷之名称和歌 |
| 一三一八頁 | 上 七行 | 皇太子世仁親王に讓位、 | 皇太子世仁親王（8）に讓位、 |
| 一三八〇頁 | 下 一五行 | ○為家存疑歌（為家 6001-6011）。 | ○為家存疑歌（為家 1762-1766・6001-6011）。 |
| 一三八〇頁 | 上 四行 | 七月二十四日 | 七月二十二日 |